

『ローランの歌』における

若干の類義語 (続)

目 黒 士 門

(1) 前稿では、『ローランの歌』にあらわれる類義動詞のうち、nasfrer / blecer, oïr / entendre / esculter, repaier / revenir / returner の3組を取扱った。本稿では、quider / quier / penser / creire, remembrer / souvenir, traire / tirer の3組の類義動詞について意味論的考察を行なうことにする。

I. QUIDER, QUIER, CREIRER, PENSER

『ローランの歌』ではこの4語が類義関係にあるが、それぞれの用例数は、quider 11例、quier 5例、creirer 15例、penser 3例である。(2) これら4語の『歌』における意味論的差異の検討に先立って、各語の語原および意味変化を概観しておこう。

Oscar Bloch et W. von Wartburg (以下たんに Bloch と記す) によると、(3) quider および quier に関しては記述がない。creirer については、現代

(1) 拙稿「『ローランの歌』における若干の類義語」(東北大学フランス文学会編『ルガール』誌第8号所載)参照。

(2) Foulet の *Glossaire* では、v. 395 および v. 1588 を quider の例に数えると同時に、quier の例にも数えている。従って、実際の用例数は、quider の用例と quier の用例をあわせた数字(11例+5例=16例)よりも2例すくない。なお、オクスフォード写本でなく Bédier 版(1937年版)によるならば、*Glossaire* の行数表示には、次の訂正を要する。

quider : v. 1588 → 1631

v. 1590 → 1633

v. 1666 → 1505

quier : v. 1588 → 1631

(3) Oscar BLOCH et W. von WARTBURG, *Dictionnaire étymologique de la langue française*. 以下、本文中で Bloch とあるのは、すべて本書を指す。

語の croire の項で, croire < lat. credere という形態的語原を指摘しているのみである。penser については, その意味論的変遷を次のように説明している。「penser < lat. pensare. 本義では《peser》(重さを計る), 《juger》(裁く)を意味する。penser は basse époque では《penser》の意味をもっていたはずである。cf. イタリア語 pensare, スペイン語 pensar も同様《penser》の意味である。s の前の n は普通には脱落するし, また, pe(n)sare は, peser によって表わされるので, penser という形態は, 書きことばから来たものとしか説明されない。しかし, 書きことばでは《penser》という意味は確証されないから, その結果いえることは, ラテン語 pensare が学識者層の書きことばにおいて, basse époque の時代に再び採り上げられ, そしてこの語が急速に《penser》の意味をもったということである。Panser は penser の特殊化に過ぎない。まず 14 世紀よりしてすでに, penser de が行なわれ, その意味は《s' occuper de, soigner》であった。cf. *en après pense de la plaie*, H. de Mondeville, および, 前置詞なしの penser は《soigner》の意味で 14 世紀から 16 世紀に使用された。17 世紀以来, 形態によって意味を区別するために二重の正書法が使用された。すなわち, 13 世紀に《penser》の意味で panser という綴りがあらわれた。しかし, panser 《penser》は 17 世紀にもまだ使用されていた。そのほか 13 世紀よりしてすでに《penser》の意味をもった (pencer) pancer が発見される」(以下略)。

つまり, Bloch によれば, (1) penser < lat. pensare は, もとの意味は《peser, juger》であり, 学者語に採用されるに及んで《penser》の意味をもった, (2) penser と panser は, 語原を同じくする二重語である, というわけである。

この同じ 4 語について, Hatzfeld et Darmesteter の記述を調べて見よう。⁽⁴⁾ quider と quier については説明を与えていない。croire については,

(4) HATZFELD ET DARMESTETER, *Dictionnaire général de la langue française*.
以下, 本文中で Hatzfeld et Darmesteter とあるのは, すべて本書を指す。

lat. credere > creidre > creire > croire という歴史的形態変化をあげたのち、他動詞の意味として、《1° Admettre (qch) comme véritable. 2° Considérer (qn) comme véridique dans ce qu'il dit》と記し、自動詞の意味としては《1° Avoir foi à la réalité de qch. 2° Avoir foi à sa véracité. 3° Avoir confiance en son caractère.》をあげている。また、penser については、ラテン語 *pensare* が語原であるが、*pensare* は *pendere* にのっとって作られた分詞 *pensus* から派生したものであるとしている。意味は、Bloch のあげる意味とほぼ同じで、ラテン語時代には、《*peser, examiner*》であった。また、*peser* と *panser* が二重語であることもつけ加えている。penser の意味としては《I. Appliquer son esprit à concevoir, à juger qch, II. *Absolt. Exercer la faculté de concevoir, de juger*》と説明している。

Foulet の Glossaire によると、⁽⁵⁾ まず、*quider* は《*penser*》であり、Foulet は次のようにつけ加えている。「動詞 *quider* の用法には、しばしば、欲求 (*désir*) および決定 (*détermination*) の観念があり、ときとしては、かかる観念が第一面にあらわれる。すなわち、v. 2733, 3004, 3012 においてである。」

quier については、同じく意味は《*penser*》であるとしたのち、Foulet は「*quier* とその二重語 *quider* の関係は、*vuier* とその二重語 *voider* の関係と同じである」と述べている。また、Foulet は *creire* に関しては、《*tenir pour assuré*》、《*admettre comme vraisemblable*》、《*tenir pour véridique*》、《*avoir confiance en quelqu'un*》などの意味をあげているが、この二点については、のちに述べることにする。*Penser* に関しては、意味に関する説明は何も与えていない。

さて、以上の諸説をふまえて『ローランの歌』における四つの動詞の用法を検討し、その意味の違いを明らかにしよう。

(5) *La chanson de Roland, commentée par JOSEPH BÉDIER* に付されている Glossaire. 以下、本文中で Foulet とあるのはすべて本書を指す。

まず, quider と quier については, Foulet が「quider と quier の関係は, vuier と voider の関係と同じである」と述べている通り, 両者の間には意味論的差異はない。従って, 本稿では, この両者を同時に扱うことにする。Glossaire は quider, quier について « penser » としているが, 『ローランの歌』における quider, quier は, たんに « penser » という意味を与えるだけでは充分でないことももちろんである。現代語の « penser » は, すでに見た通り (Hatzfeld et Darmesteter), 1° Appliquer son esprit à concevoir, à juger qch. 2° Exercer la faculté de concevoir, de juger を意味する。『ローランの歌』の quider, quier の意味は, この Hatzfeld の与える定義に完全に符号するものではない。ここで, われわれは, 「動詞 quider の用法には, しばしば欲求および決定の観念がある」という Foulet のことばを想い起こそう。その例として Foulet は, v. 2733, 3004, 3012 をあげているが, それにさらに, v. 395, 1590 をつけ加えることができる。かくして, quider, quier は, 14 例中, 5 例までが欲求および決定の観念を表わしている。意味を与えるならば, « compter » が適当であろう。他の 9 例については, 一般に « penser » であるが, « penser » の意味をさらに規定するならば, « appliquer son esprit à concevoir, à juger qch » である。この例としては, v. 150, 1631, 1505, 1848, 3724, 764, 3506 をあげることができる。v. 2904 については, « Il me semble » がより適当であり, v. 2121 に関しては, « s'estimer » がよい。注意すべきことは, 『ローランの歌』では, « penser » の意味のうち絶対用法すなわち « exercer la faculté de concevoir, de juger » という意味をもって quider が使用されることはなかったということである。

この検討から, 『ローランの歌』における quider, quier の意味は, ① Appliquer son esprit à concevoir, à juger qch, ② compter の二つに要約できよう。

次に creire に関しては, Glossaire の説明によれば, « tenir pour assuré »

1 例 (v. 692), «admettre comme vraisemblable» 2 例 (v. 575, 1006), «tenir pour véridique» 5 例 (v. 196, 220, 577, 1728, 3458), «avoir confiance en quelqu'un» 5 例 (v. 1634, 3406, 3599, 3666, 3980) の四つの意味に分類され, 「この最後の意味では, *creire Deu*, v. 3980, および *creire en Deu*, v. 1634, 3666, *Donc ne faz jo que creire* (v. 987), «alors je ne fais [rien] que [l'on doive] croire», «je ne mérite pas d'être cru» がある」と Foulet はつけ加えている。Foulet が «avoir confiance en quelqu'un» の意味を与えるこの 6 例のほか, *Glossaire* に分類指摘されていない v. 2753 も同じ意味である。このように, *quider*, *quier* がつねに «concevoir, juger» または «compter» を意味したのに対し, *creire* が «concevoir, juger» の意味をもたず, «véritable, véridique»に通ずる意味や «avoir foi» の意味をもっていたことは, この時代における *creire* の意味の特質であるといえよう。

penser は, 3 例中, v. 138, 2788 は, 自動詞で, 目的語なしに «exercer la faculté de concevoir, de juger» の意味に用いられている。v. 355 では, 他動詞で再帰的に使用されているが, 意味は «concevoir» である。

このように見てくると, 『ローランの歌』における類義語 *quider* (*quier*), *creire*, *penser* は, それぞれ異なった意味領域をもっていて, この三語の存在理由がうなづかれるのである。

2. REMEMBRER, SUVENIR

『ローランの歌』では, *re souvenir* が 6 例, *souvenir* が 1 例, いずれも非人称動詞として使用されている。

Bloch は *re souvenir* については記していない。しかし, *remémorer* の項で次のように述べている。「*remémorer* は, lat. de basse époque, *rememorari* からの借用語であり, *re souvenir* という俗語的形態を排除した。*re souvenir* は 16 世紀以来使用されなくなった」と。同じく Bloch は, *souvenir* について「まず最初は非人称で *il me souvient*, etc という表現に

使用されたが、今日ではこの用法は古風である。あるいは、この語は、事物を表わす主語とともに構成された。se souvenir という人称的表現は se rappeler に範をとって作られたが、これがあらわれたのは 14 世紀である。しかし、一般に使用されるようになったのは 16 世紀に過ぎない。《venir à l'esprit》の意味におけるラテン語の subvenir は、非人称構文であった。本義では、《venir au secours》であった」と述べている。つまり、Bloch によれば、re souvenir は俗語的形態であり、suvenir < lat. subvenire は、本来は非人称構文に用いられたわけである。

Hatzfeld et Darmesteter は、re souvenir については、lat. rememorare > *remem'rer > re souvenir (cf. 学者が作った対語 remémorer) という形態的語原をあげ、意味に関しては、古語および地方語で《remettre en mémoire》だとしている。そして、特殊化した意味で《se souvenir》をあげている。つまり Bloch のいう俗語的形態 re souvenir は、remémorer の対語 (doublet) なのである。他方、suvenir に関しては、Bloch と同じく、lat. subvenire > suvenir > suvenir を語原としており、意味は、(1) 非人称動詞のばあい、《être représenté à l'esprit》、(2) 代名動詞 se souvenir de のばあい、《se représenter à l'esprit (une chose passée)》としている。

Foulet は *Glossaire* で次のように述べている。まず re souvenir に関しては、「《revenir à la mémoire》、人称の与格を伴なう。しかし、v. 820 では、同じ意味で、Dunc le re souvenir des fius e des honurs となっており、Bédier 版では、le を lur に訂正した」と記している。Suvenir に関しては、Foulet は、《suvenir à qn de》という訳語を与えているのみである。

ところで『ローランの歌』におけるこの 2 動詞の用法を検討してみると、re souvenir も suvenir も、(1) 非人称的に使用されている、(2) 与格を伴なう、(3) 《se souvenir de》の意味であることにおいて、両者の間に違いを見出すことはできない。両語の間に意味論的差異があったかどうかを知るため

には、さらに多くのテキストに当たって見る必要がある。しかし、『ローランの歌』に関する限り、*revenir* が古代フランス語の一般形であり、*suvenir* は、おそらく当時としては情意的価値に富んでいた語であろうと推定するほかはない。

3. TRAIRE, TIRER

『ローランの歌』における *traire* と *tirer* の用例数は、それぞれ、15例と5例である。

Bloch は、*traire* について次のように述べている。「*traire* は本義では《*tirer*》である。16世紀までこの意味であった。そして、この意味は、今日では若干の俚言（ノルマン語、ワロン語、スイス・ロマンドの方言）にのみ存続している。また、《*tirer le lait d'une femelle*》の意味に特殊化したか、この意味は14世紀以降ははっきりと確証された。しかし、それ以前にあったことも確かである。なぜなら、Charles d' Anjou に伴ってイタリア南部へ行き、そこに植民地を建設したドフィネ人たちは、その地にすでにこの意味をもたらした。lat. pop. **tragere* は、lat. class. *trahere*（過去分詞では *tractus*）の修復形であるが、この修復は、意味の関連をもつ *agere: actus* をモデルとして行なわれた。《*mener*》は《*tirer*》から非常に離れているというわけではない。現代の意味における *traire* は、古代フランス語 *moudre*, lat. *mulgere* 《*traire*》にとって代わったものである。その結果、この語は *moudre*, lat. *molere* の同音語となった。この代替は、同じく大部分の北部諸方言において行なわれた。（*tirer* は、そのとき以来、ことに中央フランスおよび西部フランスに拡まった。）ただし、ワロン語の一部では例外で、ここでは南仏におけると同様、*mulgere* が保存された。cf. 古代プロヴァンス語 *molzer*, そこから現代諸地方語の諸形態が生まれた。cf. イタリア語 *mungere*, しかし、スペイン語では、*ordenare*, lat. pop. **ordiniare*. これは本義では《*mettre en ordre*》、同じくこれはほかにも存在する」と。Tirer

については、Bloch は「tirer, 1080年頃 (Roland), cf. イタリア語 tirare, スペイン語, 古代プロヴァンス語 tirar. これはおそらく, 古代フランス語 martirier « martyriser » « torturer » の収縮形である。最もひんぱんに加えられた責苦のひとつは四肢の脱臼であった。中世における死刑執行人の通常の名称 tiranz < lat. tyrannus は, 現在分詞と同じ形態をもっていたので, martirier, martirant の現在分詞には, この tiranz と副詞 mar « malheureusement » (< lat. mala hora « à la mauvaise heure ») との複合を見ることができた。現在分詞につづいて, 動詞全体がかくの如く感じられた。その結果, 単なる tirer という形態が, 最後には, この動詞から切り離された。tirer は大部分 traire にとって代わった」と述べている。要するに « tirer » を意味する traire は, 俚言を除いては 16 世紀に消滅し, 今日では tirer にとって代わられたわけである。

Hatzfeld et Darmesteter によれば, traire については, Bloch の説明とほぼ同じで, 語原は lat. pop. *tragere (lat. class. trahere, 分詞 tractus によって作られた形態) > *trayere > *tray're > traire としている。意味は, 古くは « tirer » であり, 現代では特殊化して « tirer le lait d'une femelle, en lui passant le pis » となった。他方, tirer については, Hatzfeld et Darmesteter は, 「語原は確かでない。発音からすれば, tirer をゲルマン語 tairan (ネーデルランド語 teren, 英語 tear, etc.) に結びつけることはできない。なぜならば, ゲルマン語の tairan は tirer の i の存在を説明することはできないからである。cf. プロヴァンス語, スペイン語, ポルトガル語 tirar, イタリア語 tirare, etc.)」と述べている。そして, tirer の意味としては, I. « Chercher à allonger, à tendre(un objet) en l'amenant à soi par un bout, » II. « Faire venir dans une certaine direction, en prenant (la personne, la chose) par une de ses parties qu'on amène à soi, 1° en restant soi-même immobile, 2° en marchant soi-même dans cette direction, » III. Amener (une personne, une chose) hors d'un lieu

où elle est enfermée, retenue. » の3つをあげている。

Foulet は *Glossaire* で, *traire* について次のように説明している。「《tirer》 (l'épée); および一般に 《saisir vivement》; 《arracher》 (les cheveux); 《lancer》 (un carreau d'arbalète): faire traire (v. 3749) については, 《faire comparaître》 (または 《faire traîner》?) である。代名動詞としては, 《se retirer》 の意。自動詞としては, 《ressembler (à)》 の意。」としている。tirer については, 「tirer は tireres と同義。v. 2283 en cel tirer では, 不定法が名詞的に使用され, 意味は, 《comme il lui enlevait ainsi (son épée)》 である。ほかの4つのばあいは, tirer sa barbe という表現である」と述べている。これらの諸説をふまえて, 『ローランの歌』における traire と tirer の意味を検討しよう。

Traire, tirer の意味の決定には, これら2動詞のとり目的補語の性質がきわめて重要であるように思われる。traire が『ローランの歌』でとり目的補語は, l'épée 8例 (v. 811, 1324, 1365, 1367, 2089, 3402, 3431, 3576), les cheveux 2例 (v. 2596, 2906), Olifant 1例 (v. 2104), un carreau d'arbalète 1例 (v. 2265), そして残りの3例は, 使役動詞1例 (v. 3749), 代名動詞1例 (v. 2131), 自動詞1例 (v. 3177) となっている。この目的語の性質からして, 《tirer》 (l'épée), 《arracher》 (les cheveux), 《saisir》 (l' Olifant), 《lancer》 (un carreau d'arbalète) という意味を与えることができるわけである。使役動詞 (v. 3794) については 《faire comparaître》, 代名動詞 (v. 2131) については 《se retirer》, 自動詞 (v. 3177) については 《ressembler à》 という意味を Foulet が与えていることは, すでに見た通りである。かくして, 古代フランス語の traire は, 現代フランス語の 《tirer》 よりも意味領域が広がったといえることができる。他方, tirer は, 『ローランの歌』では, 5回しか使用されておらず, そのうち4例までが sa barbe を直接補語としている。その意味は, 《tourmenter sa barbe》であろう。v. 2283 に関しては, Foulet は, 《comme il lui enlevait ainsi (son épée)》 としているが, こ

のばあいの *tirer* は、*traire l'épée* とはいささか意味が異なっている。

Traire と *tirer* の用法の違いから結論づけうることは、(1) *traire* が多義性に富んでいたこと、(2) *tirer* は《*tirer*》であるよりはむしろ《*tourmenter*》(いじくる、しごく)の意味をもっていたこと、である。*tirer* が *traire* にとって代わる以前には、両語が別の意味をもっていたことがわかる。

以上で『ローランの歌』における類義語の研究に一段落をつけることにするが、『ローランの歌』にあらわれる全動詞から見れば、新旧両語が張り合っただけで類義関係を形成している動詞は比較的すくない。つまり、(1) 現代語の動詞語彙のうち、きわめてすこしのものしか『ローランの歌』の時代に使用されていなかった、(2) 大部分の動詞に関しては、古代フランス語に属するもののみが支配していた、ということが出来る。このことからさらに、大部分の動詞語彙の代替の現象は、フランス語史のもっとのちの時代に行なわれたということができよう。